

NO	質問内容	回答
1	講演内容を実現するために、重要な役割を担う機関はどこになるか。	「防災」という視点では、発災後は全庁対応となることから、部局に関係なく全機関でそれぞれの役割を認識し、平時からそれぞれが担う役割に対して備えることが理想と考えます。
2	ボランティアへの意欲は高いが、その後の社会貢献につなげていくにはどうすべきか。	ボランティアや社会貢献を始めるきっかけが「誰かのために役に立つ」ためであっても、「自分たちの未来を明るくするため」の手段であり「自分事」であるという意識の転換をどこかのタイミングで促してあげることが重要だと考えます。
3	小中高生が日頃から関われるボランティア活動はあるか。（親子で参加できるもの含む）	参加しやすく達成感を感じやすい活動は「地域の清掃活動」ではないでしょうか。町会・自治会や公園管理者、区民団体が行う近所の活動であれば親子での参加もしやすいと思います。
4	子どもにボランティア意識をつけるために日頃からできることは何か。	ボランティア意識の醸成の前段階の部分ですが、「誰かの役に立つ」ことで「自己肯定感が高まる」実感を多く経験してもらうことではないでしょうか。ここでの「誰か」は家族や親戚、ご近所、友人など、「感謝」の言葉をかけてくれる「大人」の存在が不可欠だろうと考えます。
5	学生の地方ボランティアへの交通費等は自己負担になるのか。	災害救援活動などの一部の活動には助成団体による支援がありますが、基本的には自己負担になります。
6	若者にボランティアに参加してもらうにあたり、若者自身の身の守り方をどのように伝えているか。	本会では、いわゆる応急救命や一時救命措置を全会員必須で行っています。また、活動地で起こりうるリスクについて（例えば、森林整備の活動であれば刃物や動力機材、蜂・蛇など）事前の勉強会で、その危険性や安全確認の方法などのレクチャーをしてから活動にのぞんでいます。
7	四者連携（世田谷区社会福祉協議会、世田谷ボランティア協会、せたがや防災NPOアクション、世田谷区）では、発災から何日後くらいにその四者は機能するのか。	発災の規模によって「何日後」から機能するのは断定できませんが、計画上では「4日目」から機能できるようそれぞれが準備していくことになっています。
8	防災グッズの保管場所はどこが良いか。	“もの”によって場所を変えると良いです。避難行動時に必要なものは「玄関」、外出中に必要なものは「車」や「鞆」、避難生活時に必要なものは「押し入れ」など、いつ、どこで必要であるかと保管場所は連動して検討してください。
9	地域によって住んでいる人々の考え方が異なる部分があると思う。災害対策も地域別のモデルが必要かと思うが、都会のモデルはどのようにすべきか。	首都圏のような人口が多い場所は、共助の主役となる地縁組織である町会・自治会の範囲の人口も大きくなります。そこで、自助、共助、公助のなかの、自助と共助の間に「近助」という「数十人から100人程度の範囲のご近所の助け合い」の概念が必要ではないかと言われています。この「近助」の支援について考えていけるモデルづくりが必要なのではないかと思います。
10	民間セクターとは具体的にどのような団体か。	世田谷区社会福祉協議会、世田谷ボランティア協会といった大きな法人組織から、世田谷区視力障害者福祉協会などの多くの当事者・家族の支援団体組織など。青少年地区委員会・青少年補導連絡会の委員の方々も含まれます。自治体組織と連携、協働しながら活動を行っている民間の組織体すべてを指します。
11	大学生ボランティアはどのように集めているか。	大学内で公認のクラブ活動としてコミュニティが認められているところは、いわゆる普通の新入生勧誘です。また、最近はSNSなどのネットツールを使った募集でも集めています。